# 駿河国宇津ノ谷峠の地蔵伝説

## ――「素麺地蔵」の食人鬼退治を中心として――

木村文輝

一　宇津ノ谷峠の二体の地蔵
(一)　駿河国宇津ノ谷峠
(二)　二体の地蔵尊
二　「素麺地蔵」と食人鬼伝説
(一)　慶竜寺の地蔵縁起
(二)　栃木県の「素麺地蔵」伝説
(三)　「素麺地蔵」伝説と日光山の強飯式
(四)　宇津ノ谷峠の「素麺地蔵」伝説
(五)　宇津ノ谷峠の「食人鬼」伝説
(六)　地蔵の遷座と十団子
(七)　もう一つの「素麺地蔵」伝説
三　宇津ノ谷峠と地蔵信仰
(一)　宇津ノ谷峠に伝わる他の地蔵伝説
(二)　「素麺地蔵」伝説翻案の意義
駿河国宇津ノ谷峠の地蔵伝説（木村）

### 一　宇津ノ谷峠の二体の地蔵

#### (一)　駿河国宇津ノ谷峠

駿河国宇津ノ谷峠は、駿府（現在の静岡市）の町から東海道を西へ約一〇キロ、丸子宿と岡部宿との間に位置し、かつての有度郡と益津郡との境、現在の静岡市とその西側の志太郡岡部町との境をなしている。東海道の官道は、奈良時代頃まではこの峠の東側に位置し、駿河湾に程近い日本坂を経由していたと言われている。宇津ノ谷峠が日本坂に代わって官道に組み込まれたのは平安時代以降のことであり、その後今日の国道一号線に至るまで、この峠が東海道の一部をなしてきた。(1)

ただし、往時の峠越えには二つの道が存在した。すなわち、峠の南側を通る室町時代頃までの「蔦の細道」と、江戸時代に街道に組み入れられた北側の「旧東海道」である。しかし、蔦の細道は江戸時代の中頃には完全な廃道になった。このことは、寛政九年（一七九七）に秋里籬島が著した『東海道名所図会』の記述等からも窺われる。[2] さらに、明治時代に峠の下にトンネルが掘削されると、旧東海道も使用されなくなった。そして、この二つの道は昭和四〇年代に郷土史家の春田鐵雄氏らによって再発見されるまで、完全に幻の存在となったのである。

現在、宇津ノ谷峠には片側二車線からなる約八五〇メートルのトンネルが貫通し、自動車ならば一分程で通り抜けることができる。しかし、標高約二〇〇メートル、行程にしておよそ二キロの峠道が、かつては東海道の難所として街道を往来する旅人達を悩ませてきた。『吾妻鏡』によれば、承元四年（一二一〇）に源実朝の「御台所御方女房丹後局」がこの峠で山賊に出会い、財宝や装束を略奪される事件が起きている。[3] また史実ではないけれども、安政三年（一八五六）に初演された河竹黙阿弥原作の歌舞伎「蔦紅葉宇都谷峠」では、この峠が陰惨な「文弥殺し」の舞台として描かれている。蔦草のからまる宇津ノ谷峠のイメージが、人々の意識の中に不安な峠道の印象を植え付けたのであろう。同時に、小さな峠道とは言え、旅人達にとっては、この峠越えが常に追剥等の恐怖と背中合わせの道であったことが窺われる。

ところが、その一方で、宇津ノ谷峠は文学の世界で広く知られた場所でもあった。そのきっかけになったのが『伊勢物語』である。物語の中で常に「男」として登場する主人公は、都を追われて東国へ下る途中の若き公達で、古くから在原業平がモデルとされてきた。その主人公が宇津ノ谷峠で偶然にも知人の修行僧と遭遇し、都の知人への手紙をことづけるのである。物語はその場面を次のように描いている。

行き〳〵て、駿河の國にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、つたかえでは茂り、物心ぼそく、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かゝる道はいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人

の御もとにとて、文書きてつく。

駿河なる宇津の山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり[4]

『伊勢物語』で取り上げられて以後、宇津ノ谷峠は様々な紀行文学に登場し、歌枕としても有名になった。そうした作品の中で、宇津ノ谷峠は多くの場合、『伊勢物語』の故事にならって人と出会う場所、文をことづける場所、あるいは夢と現実のはざまの場所として描かれてきた。文学作品に描かれたこの耽美な情景と、追剥強盗や凄惨な殺人を想起させる陰鬱な峠道の印象との懸隔は極めて大きい。しかし、この二つの性格を共存させているところに、宇津ノ谷峠の特徴がある。

その意味を考える際に、注目すべき点が「宇津ノ谷」という地名である。折口信夫や国文学者達の研究を通して、「宇津（ウツ）」は「空（ウツ）」に通じ、中が空洞、空っぽの状態を表わす言葉だと解釈されている。また、それは「魂の籠もる場所」を示すとともに、そこに籠もることによって心身を浄化させ、生命力の復活をもたらす場所を意味していたであろうことが指摘されている。加えて、我が国では古来、峠は二つの土地の境であるとともに、あの世とこの世の境として意識されてきた。つまり、「宇津ノ谷峠」は文字通り、この世の魂があの世に移り、そこで一時的な籠もりを経験することで再びこの世に蘇ってくるための、生まれ清まりの場所とみなされていたのである[5]。

それだからこそ、宇津ノ谷峠はあの世に連なる夢の世界と現実の世界との境であり、それ故に、遠く離れた人の魂を呼ばい、心の交流を果たす場所となり得たのである。同時に、そこはこの世の人をあの世へ送る殺生という行為や、この世の様々な財宝を奪い去るという出来事が起こり得る場所だとみなされても不思議ではなかった。のみならず、都落ちした若き公達にとっても、この峠を通過することは、その罪過を清め、新たな復活を遂げるために不可欠の舞台設定だったのである。

## (二) 二体の地蔵尊

宇津ノ谷峠の東西の麓には、それぞれ一体ずつの地蔵が祀られている。どちらも正確にいつ頃から祀られているのかわからないが、万治三年（一六六〇）頃に著された『東

図１　宇津ノ谷峠見取り図
（国道一号線道の駅「宇津ノ谷」の案内板より）
図中左下の「鼻取地蔵の碑」の場所に「坂下地蔵堂」がある

海道名所記』には、「峠に地蔵堂あり。又、下り坂口にも、地蔵あり」[6]と記されており、当時、既に二体の地蔵が存在したことが窺われる。

これらの地蔵の起源について、野本寛一氏は、蔦の細道の途中、峠の鞍部から西へ百メートル程下ったところにある通称「猫石」が古代の境神の磐座であり、その境神が後に地蔵と習合したのではないかと推測している[7]。この境神に対する信仰は、今日では国境や村境、あるいはその地理的な境界をなしている峠等に道祖神や地蔵を祀るという形で残されており、その事例は全国各地で数多く報告されている。かつてこのことを指摘した柳田國男氏は、道祖神とは本来「境を護る神」であり、外敵の侵入を防ぐ「塞障（さえ）」の神として、「人間が防御するにしても好都合な、通路の一地点を擇ん」で祀られたと論じている[8]。さらに柳田氏は、地蔵は地獄の入り口とされる賽の河原で幽明二界の境を護る存在であり、同時に「生命を司り更に又幽界を支配」する閻魔大王と同一視されていた。そのために、境界防護の役割を担うことになり、やがて道祖神と習合して峠等にも祀られるようになったと推測している[9]。そうだとすれば、

図２　坂下地蔵堂の延命地蔵
（平成15年８月23日撮影）

この世における境界とともに、この世とあの世の境界としての意味をあわせもつ宇津ノ谷峠においても、地蔵が「境を護る神」として祀られたことは十分に考えられる。

宇津ノ谷峠の西側の地蔵は、蔦の細道と旧東海道の岡部側の分岐点に位置する坂下地蔵堂に祀られており、古くから地蔵堂の前に住む那須野家が別当として管理してきた。元禄一五年（一七〇二）に新鋳されたこの地蔵堂の梵鐘には、曹洞宗の学僧である卍山道白の撰による銘文が刻まれており、その中には「聖徳太子手刻之地蔵菩薩霊像」という伝承と、その前年に尊像を修理して地蔵堂を再建したことが記されていた[10]。地蔵像は台座を含めて高さ約一三〇センチ。左手に宝珠、右手に錫杖をもつ木製立像である。この地蔵は二〇年毎に開帳される秘仏とされており、前回は平成一五年が開帳の年であった[11]（図２）。

一方、東側の地蔵は、現在、旧東海道の上り口にある曹洞宗宇津山慶竜寺に祀られている。しかし、かつては旧東海道の峠から二〇メートル程東側に下った所に祀られており、「峠の地蔵」と呼ばれていた。当時から慶竜寺が別当としてこの地蔵を管理していたといい、峠の地蔵堂を描いた

図３　慶竜寺の延命地蔵
（建設省静岡国道工事事務所監修、東海道弥次喜多研究会発行
『東海道宇津ノ谷峠』より転載）

図４　慶竜寺の「おまえたてさん」

とされる絵馬が慶竜寺に残されている。また、先に述べた歌舞伎「蔦紅葉宇都谷峠」の「文弥殺し」は、この地蔵堂がその舞台とされていた。

けれども、明治時代になって旧東海道が使われなくなると、峠の上では参詣に不便だという理由で、地蔵は宇津ノ谷の集落に下ろされることになった。ところが、石の地蔵は重くてなかなか持ち上がらない。明治四四年七月、地蔵が急に軽くなったというので[12]、地蔵堂とともに麓の慶竜寺に下ろしたところ、翌年大規模な山崩れが起こり、地蔵堂のあった場所は土砂で埋まってしまった。地元の人々は、地蔵がそのことを予測して麓に運ばせたのだと噂しあったと伝えられている[13]。

この地蔵は弘法大師作と言われる石造の座像で、高さは約八〇センチ。両手を組んで宝珠を捧げ持つ姿をしている（図3）。慶竜寺では本堂正面の須弥壇中央にこの地蔵を納める厨子を安置し、その右脇に本尊の十一面観音を祀っている。しかし、この地蔵は二一年毎の本開帳と、一一年毎の中開帳の時を除いて秘仏とされている。前回の本開帳は平成七年であった。そのため、この厨子の前には通常は「おまえたてさん」と呼ばれる高さ一一〇センチ程の木製の地蔵立像が安置されている[14]（図4）。

ちなみに、坂下地蔵堂と慶竜寺の地蔵はいずれも「延命地蔵」と呼ばれている。しかし、それらが本来別々の存在であったのか、それとも同一の地蔵であったのかは定かでない。ともあれ、これらの地蔵には幾つかの伝説が語り継がれてきた。本稿では、そうした伝説の中から特に慶竜寺の地蔵にまつわる「素麺地蔵」と食人鬼退治の伝説に焦点をあてて、この伝説の意味を探るとともに、宇津ノ谷峠における地蔵信仰の特徴を考察することにしたい。

## 二　「素麺地蔵」と食人鬼伝説

### ㈠　慶竜寺の地蔵縁起

慶竜寺に祀られている地蔵の略縁起が、現在、静岡県立図書館に保管されている。表紙に「東海道宇津之谷峠地蔵大菩薩冥縁起　別當慶竜禅寺」（以下「略縁起」と略す）と記された四丁八頁からなる冊子で、江戸時代に著されたと推定されるが[15]、正確な年代は不明である[16]。その全文を、以下に五つの部分に区分しながら翻刻する。

〈野州素麺谷の地蔵伝説〉

（一頁）抑東海道宇津之谷峠地蔵尊ハ、人皇五十二代嵯峨天皇の御宇、弘仁三年（八一二）、弘法大師東遊の節、衆生教化のため、みづから地蔵の尊像をきざみ、野州宇津の宮の山奥に安置せらる。此処の人、欲心深くして、人の難儀をよろこび、旅人のもてなしに、家々皆、素麺をうり、多く椀数をならべ、理不仁に價をとる。其仕業、実に人をおひおとすにひとし。時に、大師御作の地蔵尊は遊歴の僧と現し、垂跡愛宕権現ハ白髪の老人とあらわれ、同しく其処に（二頁）ゆひて、素麺を食す。出すに随て、両人是を喰ふ。いかほど出しても飽たる体なく、猶しきりにこれを喰ふ。其家麺つきて、隣家にもらふ。隣家もまた尽く。近所をあつむ。其辺、貯も皆つきたり。人々あきれて過を謝し、其故を問へば、只後の谷をゆびざす。是を見れば、素麺流れてたきのごとし。なをいましめていわく、「汝等、人の難儀を悦ぶ事なかれ。欲心を逞しうする事なかれ。只、慈悲を専らにして善にはしたがふべし。悪にはそむくべし。（三頁）善悪ともに汝より出るものハ、汝にかへる。今、我等にあたへし素麺も、悉く汝にかへす」といつて、本体を現じ、けすが如くにさり玉ふ。今、其処を名づけて素麺谷といふ。

〈食人鬼の出現〉

其頃、当所宇津の谷の北に幽谷あり。渓水ながる。其下に寺あり。梅林院といふ。其寺の住僧、難病をうけ、苦痛たえがたし。膿血を吸ひ出せバ暫く其苦痛を忘る。故に、時々小僧に命じて是を吸しむ。朱にまじハればあかくなるの諺、おそるべし。其小僧、自然と人の肉の味ひを覚へて、終に人を喰ふの鬼となり、（四頁）此山をすみかとなし、往来の旅人を捕へて是を喰ふ。故を以て、人跡をのづからたえ、通路已にふさがる。是、天安年中（八五七－八五九）の事なり。今、其処ハ旧趾のみあつて、寺は桂島村の山奥、谷川のほとりにあり。梅林禅院といふ。

〈食人鬼の退治〉

こゝに、貞観年中（八五九－八七七）、在原業平卿、東国下向節、勅を蒙り、此処へ向ひ玉ふに、通路たゆる事、年久し。故に、みづからおひしげれる蔦蘿をわけ

て下り玉ふ。今、津たの細路とて、木こり、草刈抔(など)のゆきかよふかすかなる道あり。此卿、御下向の時、野州素麺（五頁）谷の地蔵尊に祈願し玉ふハ、「今、駿州宇津の谷の山路に鬼神有て、人民をなやまし、通路已にたえたり。願くハ菩薩の願力を以、彼地に遊行し、悪魔を降伏し玉ハゞ、只、人民を救ふのみならず、天下の幸ひならん」と。深く祈願し玉へば、菩薩忽ち遊歴の僧となつてこの地へ出現し玉ふ。彼鬼神ハ柔和の姿と化していづ。僧とふていわく、「汝ハ何者なるぞ。」彼答て云く、「我を祥白(しょうはく)童子といふ。汝ハ何者にして、いずれの処より来る。」僧の云く、「汝を化度せんがため、（六頁）はるゞ〳〵此地にむかふ。汝、速(すみやか)に本体をあらわせ。」彼、忽ち二丈餘りのおそろしき姿となる。僧の云く、「汝、通力自在にして、よくもろ〳〵の形をあらわす。若(もし)、よく極小の形をあらはし、我掌の上にのらんや。」彼、即一小丸となりて、僧の掌にあり。杖を以てこれをうてば、砕て十粒となる。猶、咒願していわく、「汝、後、来人をなやます事なかれ。われ、汝を化度し終る」と。一口に是を呑玉ふ。以後、今に至て、妖魔(おに)の障りなきのみならず、駅路繁栄の一境となる。

〈野州素麺谷の地蔵の遷座〉

彼野州素麺（七頁）谷の尊像もまた、道中守護のため此峠にうつらせ玉ふ。この地、いにしへの難事を忘れざるがため、十団子をこしらへ、又遠く野州をしたふて、家々皆素麺をうる。実に、菩薩廣大の慈悲力、万世不朽の碑銘(しょうこ)なり。また、夢想の告あり。いわく、「十団子を以て我前にそなへ、信心堅固にして是を喰ひ、これを所持せば、道中安全、諸事意のごとくならしめむ」と。

〈飛騨甚五郎の厨子寄進〉

其後、当御代にいたり、府中におゐて浅間両社御裂請あり。宮殿御建立のみぎり、飛騨の住人、工匠（八頁）甚五郎なるものをめして棟梁の職となし玉ふ。甚五郎、その大任を蒙り、首尾成就の冥助をいのるがために、厨子一宇を作り、これを寄附す。今猶あり。その霊験のごときハ、雨をいのれば雨忽ちくだり、晴をねがへば天忽ち晴れ、疫病をのぞき、難産をすくひ、盗難火災をふせぎ、旅人をまもらせ玉ふ事、数ふるにいとま

なし。今ハ只略してこれをしるすのみ。

### (二) 栃木県の「素麺地蔵」伝説

慶竜寺の「略縁起」に記された「野州素麺谷の地蔵伝説」とほぼ同じ内容の伝説が、下野国、すなわち現在の栃木県に残されている。ただし、主人公の地蔵は「宇津（都）の宮の山奥」ではなく同県塩谷郡氏家町のものであり、素麺谷の地蔵伝説は、そこから鬼怒川沿いに西へ約三〇キロ離れた日光山中を舞台としている。

氏家町は、宇都宮市の北約一五キロに位置する。ＪＲ氏家駅から南へ約二キロ、勝山城跡に程近い堂原（どうっぱら）地蔵堂にこの地蔵は祀られている（図5、図6）。この辺りもかつては上人坂によって往古の氏家村の境界であったと考えられており、境神としての地蔵が祀られるにふさわしい場所である[17]。しかし、享保八年（一七二三）以前に成立した『氏家記録伝』が伝えるこの地蔵の由来は、境神としての性格からは大いに異なっている[18]。

それによれば、天喜五年（一〇五七）、源頼義が奥州の阿倍頼時を討った際にこの地に勝軍地蔵を祀り、併せて七堂伽藍を建立したという。その後、康平五年（一〇六二）に阿倍貞任、宗任兄弟が反乱を起こしたため、頼義の子、源義家が鎮圧に赴いた。ところが、義家軍が現在の河内郡河内町に達して鬼怒川を渡ろうとすると、魑魅魍魎が現れて風雨を起こし、川を反乱させた。そのため、義家は同行していた比叡山の僧、宗円に命じて祈祷を行わせたところ、河原の中に勝軍地蔵が忽然と姿を現して魔神達を退散させた。そこで、戦勝の後、義家は父、頼義が開創した寺を再興し、新たに不動堂を建立して宗円に治国平天下と逆徒調伏を祈願させた。それ故、同寺を「将軍山地蔵院満願寺」と名付け、宗円を同寺の中興開山にしたという。なお、宗円は後に還俗し、一六世紀までこの地を治めた宇都宮氏の始祖になったと伝えられている。

ところが、延宝四年（一六七六）に大金重貞が著した『那須記』の巻九「氏家原軍附地蔵縁記言」には、「地蔵縁記を開テ見に」として、これとは異なる由来が記されている。それによれば、後光厳院の時代に太宰府から下野国に左遷された氏家周綱が、勝山城を築いて満願寺を建立した。その頃、この寺にいた僧が日夜勝軍地蔵の法を修願している

図５　氏家の勝軍地蔵
（ミュージアム氏家編・発行
『勝山城――氏家氏栄光の時代――』より転載）

図６　氏家町堂原地蔵堂

と、ある時海神が現れて、五衰の苦を取り除くことをこの僧に求めた。そこで、僧が大乗妙典の法施を行うと、翌朝、鬼怒川にて波間に漂う勝軍地蔵の石像を授かった。延文二年（一三五七）四月、僧は伽藍を建立してこの地蔵を祀り、同寺を「将軍山竜宝寺」と名付けたという。[19]

この二つの地蔵縁起の中で、とりわけ前者のそれは氏家の地蔵を源氏の棟梁や宇都宮氏の始祖と結び付けて権威づけようとする作為性を感じさせる。しかし、いずれの縁起譚においても、この地蔵が勝軍地蔵とされていることは同じである。また、『那須記』が「抑此菩薩ノ垂跡愛宕大権現ト云、日羅乃霊也[20]」と記し、『氏家記録伝』もこの勝軍地蔵が「或時は垂跡将軍愛宕として悪事災難魔軍を破脚し、叛逆無道之族を亡し[21]」と述べているように、この地蔵の垂迹が愛宕権現であることでも両書の記載は一致している。

ちなみに、満願寺はその後盛衰を繰り返したが、天正元年（一五七三）に兵火にかかって全焼すると、それ以後は堂原地蔵堂として存続した。現在の地蔵堂は、元禄年間（一六八八―一七〇四）に宇都宮城主阿部対馬守によって建立されたものである。また、勝軍地蔵は六〇年毎に開帳される秘仏とされており[22]、地蔵堂の前に、秘仏の尊像を模したとされる地蔵の石像が祀られている。

さて、この勝軍地蔵には様々な奇跡譚が伝えられているが、その中の一つが素麺谷の地蔵伝説、すなわち「素麺地蔵」伝説である。この説話は『那須記』（一六七六成立）に記されるとともに、『下野風土記』（一六八八成立）や『氏家記録伝』（一七二三以前成立）にも収載された。それらの内容には多少の相違があるけれども[23]、ここでは『氏家記録伝』の中で「地蔵堂炎焼建立並奇特ノ事」として漢文調で記されている内容を、書き下して以下に示す[24]。

向（さき）に、大永中（一五二一―一五二八）、片岡氏と青谷氏の建立以来五十余年、転（うた）た繁昌すと雖も、盛者必衰、時なく、至らずして精舎終に焚す。元亀三壬亥年（一五七二）、殿下（ママ）平らぎ、信長公之代、勝山城主氏家中務佐と道城宿飛山城主平石能登守、嫡男佐渡入道道連、意を合わせて建立して故（もと）の如し。同年四月下旬、開眼入佛を為し奉り了ぬ。同年六月下旬頃、［氏家］中務佐、地蔵院之弟子に託して曰く、「我焉（ここ）にあり。即ち、日光三社権現に参詣し、宿願して姑（しばら）く当山に代わるべ

し」と。弟子は命を冠し、乃ち中品、下品、饒堂に参詣して、瀧尾の別所に至りて、飯に飢す。素麺を乞う。然る所、衆の強力山僧、左右に並び、嘲弄して将に食を用いて之を責害せんとす。已に顔色顕る（死亡した）[25]。懸に地蔵菩薩、彼等の業障に哀れみ、齢四、五之化したる沙弥に現じ、別所に至りて、同じく素麺を乞う。諸の強僧等、之を食責に為さんと欲し、即ち膳を調え、化したる沙弥の前に居る。厥の時、強僧は捜して捜して誣ると雖も、更に飽くことなく、満山之素麺を期して健り尽くす。化したる沙弥之腹、未だ満たずと言う。衆僧等、今、之に驚懼し、合掌して言わく、「真に高僧なり。常人に非ず。凡人、何如に、斯の如く能くせんか」と。爾時に、化したる沙弥、面光赫然として強僧等に告げて言わく、「汝等、向に戯弄して人を害せんと欲す。其の業報、免れざる所。我、汝等を哀（哀）れむ故に、此に現ず。已往（後）、此の如き罪を止めよ。吾は是、氏家の地蔵なり」と。消える如く失せたり。然る所、樵夫来て告げて曰く、「是より西方、素麺にて一谷を満たす」と。大衆聆て之を怪しみ、即ち行きて見るに、違うことなし。寔に此尊の妙応、勝て計るに不逞の者なり。信仰すべし、帰休（依）すべし。

元亀三壬亥年（一五七二）秋七月吉日地蔵院住僧栄慎謹みて記す。

この出来事が起こった年代を、上記の『氏家記録伝』は元亀三年（一五七二）六月としているのに対して、『那須記』は後小松院至徳二年（一三八五）五月下旬と伝えている[26]。『下野風土記』はその年代を特定していない。

一方、この物語の舞台について、『氏家記録伝』は「瀧尾の別所」と明記しているのに対して、『那須記』は単に日光山の「坊」とし、素麺で埋まった谷を「西谷」とするのみである[27]。『下野風土記』はその場所を「日光別所」と記し、素麺で埋められた谷については、「ソレヨリシテ此谷を素麺谷ト云、滝尾ヱ行道ニ有[28]」と述べていることから、瀧尾権現社の別所を想定していることが窺われる。また、享保一三年（一七二八）に刊行された『日光名跡誌』は、瀧尾権現社の「御別所」の項目の末尾に、「いにしへ氏家の地蔵索麺を所望してせめられし所ハ此別所なり。瀧の向を索麺谷と云ふなり」と記している[29]。

駿河国宇津ノ谷峠の地蔵伝説（木村）

ちなみに、瀧尾権現社は輪王寺や東照宮の建ち並ぶ場所から一・五キロ程北西の山中にある。稲荷川に沿って石畳の山道を上って行くと、途中に日光開山の勝道上人の廟等を経て、これより先は聖域とのことで「大小便禁制の碑」が現れる。更に進むと白糸の滝にたどり着き、滝の右側の石段を登ったところが江戸時代の別所跡である。瀧尾権現社はその奥に位置しており、別所から権現社に続く道筋の西側の谷が説話の伝える「素麺谷」である[30]（図7）。

伝承によれば、瀧尾権現社は弘仁一一年（八二〇）に空海によって創建された。その時、空海はこの地で護摩を焚いて瀧尾権現を勧請し、それによって天女の如き姿の霊神が姿を現したと伝えられている[31]。瀧尾権現社は日光三所権現の中の田心姫命（たごりひめのみこと）を祀っており、大己貴命（おおなむちのみこと）（二荒山権現）を祀る新宮、味耜高彦根命（あじすきたかひこねのみこと）（太郎山権現）を祀る本宮とともに、東照宮の造営以前、言い換えれば江戸時代以前の日光山の中心をなしていた。また、三社の配置からすれば、瀧尾権現社は最も奥まったところに位置する。それだからこそ、『氏家記録伝』において、氏家満願寺の僧は瀧尾権現社に最後に参詣し、その後に同権現社の別所で食事を所望したことにされているのであろう。

### ㈢「素麺地蔵」伝説と日光山の強飯式

瀧尾権現社で生まれた「素麺地蔵」伝説は、その後「地蔵責」、あるいは「日光責」の言葉を生み、日光山に伝わる強飯（ごうはん）式の由来になったと言われている。例えば、一九世紀の前半に編纂された『日光山志』の「強飯」の項には、「むかし滝尾へ地蔵変じ来り、索麺を乞ひけるゆゑ、地蔵を責めしより始まれりともいふ」と記されている[32]。

この強飯式は文字通り「飯を強いる」儀式であり、山伏姿の強飯僧が大椀にうず高く盛られた三升の飯を頂戴人に渡し、傲慢なる態度で「七五杯一粒残さず食べろ」と強要する。江戸時代以後は形式化され、輪王寺法親王や徳川歴代将軍、あるいは諸大名に対しても行われた。今日では四月二日に輪王寺三仏堂で行われているが、古くは日光山内の各別所で、毎年正月の他、適宜営まれたと伝えられている。のみならず、日光では各町屋においても祝いの席で行われていたようであり、『日光名跡誌』の中の瀧尾権現社「御別所」の項には次のように記されている。

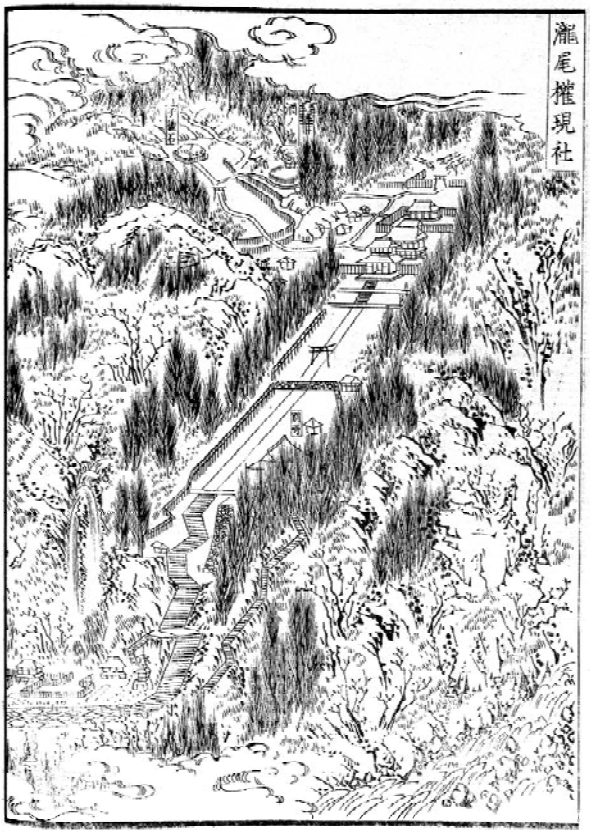


図７　『日光山志』巻２所載の「瀧尾権現社」図（部分）
（須原屋伊八板元、天保８年〈1837〉刊、静岡県立図書館蔵）
図の中央に別所が描かれている。また、階段の左側にあるのが白糸の滝であり、その奥が「素麺谷」である。

此所にて日光責とて食物を望む者あれば、其食物を与へ強責る事あり。かるがゆへに捻棒（ねじぼう）などの責道具あまた壁にかかれり。又大きせるなどもあり。惣じて別所〳〵ハいふに及ばず、坊中町方にても此事あり。他所より来りて、はじめて年をとる人ハ勿論、さなくても御宮御霊屋御代参の大名衆、大せつの来客へハ馳走のため飯を強る事古例なり。また日光の地にて養子、婚礼、新宅等の祝儀事にハかならず日光責を行ふ。是此所、故ある事にて其人のため甚（はなはだ）祈禱となるなり。[33]

この一節からも窺われるように、強飯式は古来縁起のよい行事として行われてきた。今日でも、強飯を頂戴した者は「七難即滅、七福即生、四魔退散、家運長久」の利益にあずかるとされており、儀式の最後に毘沙門天の金甲（兜）と称する注連（しめ縄）を頭上に与えられる。また、その由来に関しても、近年では山岳修行の行者が山中の行場の本尊に供えた御供を持ち帰り、それを里の人々に分かち与えたことから始まったと説かれており、これは神人共食の儀礼であると説明されている。その上で、「往時、この式が主として瀧尾権現にて行われたことも、瀧尾が回峯行の大宿となつていたことを思い合せる時、またむべなるかな、と感ぜられる」とも論じられているのである。[34]

ところが、このような解説では、強飯式が吉祥をもたらすことの説明にはなっても、大量の「飯を強いる」ことの説明にはならない。そこで、この問題をめぐっては、江戸時代から幾つかの説が唱えられてきた。藤井萬喜太氏はそうした見解を以下のようにまとめている。

山崎美成、植田孟縉、成島司直等は神祕的の行事として山僧の言に迎合してゐるが、藤井懶齋は日光權現の前身は、山麓の貧しい獵師であつたと云ふ、日光山古縁起の説を採つて來、寒食の故事に及び、痛烈に嘲つてゐる。貝原益軒と柏崎永以は簡單に東陲民俗の誇張と見てゐるのは妥當であらう。[35]

藤井氏が妥当だとみなした貝原益軒の説とは、強飯は「皆これ邊境の古風、おのづから有し事なり、何の故といふ事もなし」[36]というものであり、柏崎永以の説は、「日本にて古は、賓客に飯を専らしひる事を、礼儀とせると見えたり。今も遠国辺土の民間には、殊に食事を強る事あり」[37]というものである。そして藤井氏自身も、「この日光責の行事は、

神事法要ではなく、嘉例古實とは稱するものゝ、實は民間風俗を誇張したものであった」[36]と論じている。

そこで、古くから強飯式の由来とされてきた「素麺地蔵」の伝説を改めて振り返ってみたい。『氏家記録伝』の中で、地蔵は別所の山僧達に対して「汝等、向に戯弄して人を害せんと欲す。其の業報、免れざる所。……已往（後）、此の如き罪を止めよ」と語っていた。また、『那須記』の伝える説話では、地蔵は満願寺の僧が別所の僧達に殺されたことに「怒て」別所に現れ、「沙弥（地蔵）の偉碩、喰を為して還って悪僧を責めて曰く、我は氏家の勝軍地蔵なり。寺の聖を責め亡され、太（はなは）だ怨敵を取るべし」[36]と述べている。『下野風土記』でも、地蔵は「所ノモノ殺サレシ事ヲ無念ニ思ヒ」別所に赴き、「僧（地蔵）ハ氏家ノ意趣ヲトケテ帰リケル」[37]と記されている。これらの記述からは、別所の僧達の所業は単に人を苦しめる悪業とみなされているように思われる。

ところが、『氏家記録伝』を注意深く読み解くと、その中には他の二書と異なる点があることに気づく。すなわち、後者が地蔵の所業を単なる意趣返しとして扱っているのに対して、『氏家記録伝』の中で、地蔵は「汝等（山僧達）を衰（哀）れむ故に」別所に現れ、僧達に対して悪業を止めるべく説得しているのである。

さらに『氏家記録伝』では、別所の僧達が素麺を食べ尽くした沙弥（地蔵）に対して合掌し、「真に高僧なり。常人に非ず。凡人、何如に、斯の如く能くせんか」と語っている。[41]つまり、僧達はあらゆるものを食い尽くす能力のある者を、特別な験力をもつ者として尊崇しているのである。そうだとすれば、多量の食事を食べ尽くすことは、この験力を身につける修行の一環とみなされていたのかもしれない。それだからこそ、現在も強飯式を無事に済ませた者は、この験力を手に入れた者として「七難即滅、七福即生」等の利益を約束され、毘沙門天の金甲を授かるのではないだろうか。このように考えれば、「飯を強いる」行為には、単なる悪行とは異なる宗教的な意味が込められていると言うこともできる。ただし別所の僧達は、このような修行を望まない者にまで素麺を無理強いした点に問題がある。『氏家記録伝』において地蔵が叱責したのは、まさにこの点だと思われるのである。

ちなみに、強飯式がいつ頃から始められたのかは定かでない。栃木県下には日光山の影響で他にも幾つかの強飯式が伝えられているが、上都賀郡粟野町発光路（ほっこうじ）の強飯式は延文年間（一三五六―一三六一）に初めて行われたと言われている。[42] もしもこの伝承が確かであれば、日光山の強飯式の始まりは、日光修験の成立と同じく鎌倉時代末頃までさかのぼる可能性がある。[43] そうだとすれば、「素麺地蔵」の伝説をめぐって『那須記』が伝える至徳二年（一三八五）という年代は、強飯式の発祥と伝説の成立との関連をさらに印象づけるものである。

ただし、強飯式は「素麺地蔵」の伝説がもとになって始まったのではなく、むしろ日光山で強飯式が行われていたが故に、「素麺地蔵」の伝説が生まれたとも考えられる。あるいは、瀧尾権現社の周囲でしばしば発生した洪水を素麺に仮託して、[44] それを強飯式と結び付けることでこの伝説が生み出されたのかもしれない。いずれにせよ、この伝説の成立年代も検討の余地を含んでいると言うことができるのである。[45]

## ㈣ 宇津ノ谷峠の「素麺地蔵」伝説

さて、ここで議論を宇津ノ谷峠に戻すことにしよう。先にも述べたように、宇津ノ谷峠の「素麺地蔵」伝説は、日光山におけるそれとよく似た内容をもっている。その一方で、細かい部分では両者の間に相違点があることも事実である。これらの相違点を分析することで、宇津ノ谷峠の「素麺地蔵」伝説の意味が浮かび上がってくると思われるのである。ここでは五つの点に着目したい。

第一は、宇津ノ谷峠の地蔵が弘法大師の自作とされている点である。地蔵像が弘法大師の作と伝えられる例は全国各地に存在する。それ故、通常であればこのことを特に問題視する必要はない。しかし、ここで語られている説話が日光山の「素麺地蔵」伝説だということになると、この伝承はにわかに重要な意味を帯びてくる。と言うのも、「素麺地蔵」伝説の舞台となったのは日光山の瀧尾権現社の別所であった。そして、この瀧尾権現社は、空海が弘仁一一年に自ら勧請した霊神を祀るために開創したと伝えられている。つまり、二つの伝承の年代に若干の誤差があるとは言え、空海による瀧尾権現の勧請と鎮座を地蔵像の作成と安

置に置き換えることで、宇津ノ谷峠の地蔵縁起に即した物語の改変が行われることになるのである。しかも、それは宇津ノ谷峠の地蔵と日光山との関連を示唆する役割をも担うのである。

第二は、宇津ノ谷峠の地蔵が垂迹愛宕権現とともに出現している点である。この点は日光山における「素麺地蔵」伝説とは明らかに異なる。けれども、ここでは愛宕権現が地蔵の垂迹として現れたことが重要である。と言うのも、日光山で「素麺地蔵」の伝説を生んだ氏家の地蔵は、愛宕権現を垂迹とする勝軍地蔵であった。つまり、このことは宇津ノ谷峠の地蔵が氏家の地蔵に他ならないことを示しているのである

第三は、「素麺地蔵」伝説が生まれた背景である。日光山における素麺の食責めは、瀧尾権現社の山僧達が単に人々を苦しめるために行っていたものである。あるいは、それは先に考察したように、本来であれば特別な験力を獲得する修行の一環として行われていたものかもしれない。一方、宇津ノ谷峠のそれは、「欲心深」い「野州宇津（都）の宮の山奥」の人々が、「多く椀数をならべ、理不仁に價をとる」ことを目的としており、「実に人をおひおとすにひとし」い行為であった。これは、物語の重大な改変である。しかも、それは宇津ノ谷峠に日光山の地蔵が出現する理由付けにもなっている。と言うのも、慶竜寺の「略縁起」の中で「素麺地蔵」伝説に続く「食人鬼」伝説は、後述するように、おそらくは宇津ノ谷峠でしばしば出没したであろう追剥や強盗をモデルにしていると考えられる。その追剥や強盗と同じ所業を行う人々を懲らしめるために地蔵は登場する。つまり、「素麺地蔵」伝説のもつ意味が、日光山で語られたような意趣返しではなく、山中を通行する人々の安全保証、もしくは勧善懲悪の物語へと改変されているのである。

そして、この点を裏付けるのが第四の点である。すなわち、慶竜寺の「略縁起」では、素麺を売り付けていた人々が地蔵に対して自らの「過（あやまち）を謝」すとともに、地蔵はこの者達に対して明確な形で勧善懲悪の説教を行っている。この点は、『那須記』や『下野風土記』とは異なるけれども、『氏家記録伝』とは共通する要素である。

第五に指摘すべき点は、「素麺地蔵」伝説の舞台を日光山とせずに、「野州宇津（都）の宮の山奥」とのみ記している

点である。おそらく宇津ノ谷峠の地蔵縁起に「素麺地蔵」伝説を取り入れた人々は、この物語の舞台が日光山であることを知っていたであろう。このことは、伝承の細部で改変が施されているとは言え、物語の大筋においては日光山の伝説を忠実に継承していること、さらには、日光山において素麺で埋め尽くされた谷を「素麺谷」と呼ぶ風習が、「略縁起」の中に明記されていることからも明らかであろう。

それにも関わらず、ここで「日光山」の名前を明示しなかったのは何故なのか。まず思いつくのは「宇津ノ谷」と「宇津（都）の宮」の地名の類似にもとづく語呂合わせである。[16] しかし、慶竜寺の「略縁起」が江戸時代の成立であることに注目すれば、むしろ江戸幕府に対する遠慮であったと考える方が妥当ではないだろうか。すなわち、宇津ノ谷峠の「素麺地蔵」伝説は追剥や強盗の退治を主眼とするものである。東照大権現の鎮座する幕府直轄領たる日光を、追剥、強盗に等しい所業の舞台とすることへの遠慮が、「日光山」の代わりに「野州宇津（都）の宮の山奥」という表記を用いさせたのだと思われるのである。

では、日光山の「素麺地蔵」伝説を、宇津ノ谷峠に伝えたのはどのような人だったのであろうか。明確な根拠があるわけではないが、一つの可能性として、日光山に関わりのある修験者達をその伝播者として挙げることができるだろう。古代末期から中世にかけて、地蔵信仰が急速に全国各地に普及していく過程で、修験者が大きな役割を果たした可能性を田中久雄氏が指摘している。[17] また、宝永七年（一七一〇）頃に成立した『三山雅集』には、羽黒修験で名高い羽黒山の中台滝に「素麺不動」の伝説があることが記されており、「かかる奇特も有りける事、氏家の素麺地蔵など云へるにおなじき霊験にこそ」と述べられている。[18] ちなみに、無住国師が著した『沙石集』巻二の中で、地蔵と不動はそれぞれ大日如来の柔軟と強剛の方便だとされており、[19] 両者を一体の存在とみなす信仰が存在したことが窺われる。したがって、日光山と羽黒山で等しく素麺にまつわる地蔵と不動の伝説が存在し、日光山のそれが羽黒山で知られていたということは、修験者達によって「素麺地蔵」伝説が他の地方に伝播されていたことの一つの例証となり得るであろう。[20]

さらに、宇津ノ谷峠の西側、岡部宿の南には、宇津ノ谷

峠から峰続きの高草山があり、その頂にはかつて真言宗十楽院という修験道に関わりのある寺院が存在したと言われている。同寺は既に天正年間（一五七三－一五九二）には荒廃したとされているが[51]、宇津ノ谷峠と修験者とのつながりを想起させるには十分な存在である。のみならず、東海道上に位置する宇津ノ谷峠は様々な人々が往来した。その中に、日光山に関係する修験者が含まれていたとしても何らの不思議もないのである[52]。

### ㈤　宇津ノ谷峠の「食人鬼」伝説

慶竜寺の「略縁起」は、「素麺地蔵」伝説に続いて宇津ノ谷峠の「食人鬼」伝説を語っている。その舞台となったのが、現在岡部町桂島にある曹洞宗谷川山梅林院である。まずは、文政三年（一八二〇）に桑原藤泰が編纂した『駿河記』の中から、「谷川山梅林院」の項に記録されている同寺の伝承を見てみよう。以下に、その関連箇所を引用する。

当寺旧天台宗にて、今の地より谷奥に入こと一里許。界巖僧以来禅に転じ、其後今の地に伽藍を移す。伝云、往古天台宗の時、住僧某寵愛の児あり。此児同宿の児が生血を好み吸ふ事屢なり。終に鬼童に変じ、寺中の僧俗これ為に喰殺されて寺院退転す。又此鬼童近郷に災をなして里人を悩せり。一雲水僧宇津谷にて此説を聞き、此寺に尋ね来りて一宿す。夜更て件の鬼童既に現して敵せむと欲す。時に彼僧密印を結び、法を修し念珠を以て鬼童の頭を撃しかば、鬼絶気して斃ると云。斯て其後伽藍再興せしが又中絶す、仍後世禅曹洞宗に転て伽藍相続す。十一代の祖にあたり山崩あり。諸堂破壊。依て今の地に易地すと。云々。今の世宇津の谷茶店に髻（ひさ）ぐ十団子は、彼念珠の遺形なりと云。雲水僧は是嶺に坐す地蔵菩薩の慈悲の応化と云伝。此怪談昔伊賀國にもかゝること有しと云ふ。皆里俗伝ふる所古拙の猥談なり[53]。

この記録が伝えているように、梅林院はもと、現在地から東側へ二キロ程山中に入ったところにあったと言われており、その場所を地元では「会下の段（えげんだん）」と呼んでいる。ところが、この場所から更に東側の、尾根をはさんだ反対側の斜面にも「会下の段」と呼ばれる場所がある[54]。それ故、梅林院の正確な跡地は特定されていない。

また、同寺がいつ頃の草創であるかも不明だが、古くは天台宗に属していたことが上記の記録から窺われる。さらに、同寺が山中に位置し、そこから宇津ノ谷峠を経て十楽院が存在した高草山とも尾根伝いにつながっていることから、往時の梅林院も修験道との関わりをもっていたことも考えられる。しかし、この寺は後に断絶した。同寺が曹洞宗寺院として復興されたのは長享二年（一四八八）のことである。その時の開山は出羽国の出身で、羽黒山で修行を積んだ後に曹洞宗に転じた界巖繁越とされている[四]。つまり、天台宗の梅林院が途絶したのは一五世紀半ば以前のことである。そして、この途絶の原因とされているのが、食人鬼と化した小僧の伝説である。この点は、『駿河記』の記録と慶竜寺の「略縁起」が等しく伝えるところである。

この食人鬼伝説のモデルを、私は宇津ノ谷峠に頻出し、殺生をも厭わなかった追剥や強盗ではないかと考える。このような見方は、既に天保六年（一八三五）に新庄道雄が『駿河国新風土記』の中で示しているものである[五]。さらに想像をたくましくすれば、この峠に住み着いた強盗達が梅林院を襲い、同寺を断絶させたのかもしれない。

ところで、『駿河記』が伝える伝説は、「是嶺に坐す地蔵菩薩の慈悲の応化」である一雲水が食人鬼を退治したと伝えているけれども、「素麺地蔵」伝説には言及していない。また、地蔵は食人鬼の頭を念珠で撃って鬼を退治したと述べられており、慶竜寺の「略縁起」が伝えるように、地蔵が鬼を砕いて飲み込んだことにはなっていない。そして、この相違点こそが、慶竜寺の「略縁起」が伝える地蔵伝説の特徴であり、峠に祀られた「境神」としての地蔵の性格に関わる箇所である。

慶竜寺の「略縁起」は、梅林院の断絶を「天安年中（八五七－八五九）の事」と記している。けれども、これは明らかに、次に登場する食人鬼退治が「貞観年中（八五九－八七七）」であることを前提にしている。しかもこの年代は、伝説の中に在原業平（八二五－八八〇）を登場させるために設定されたものである。さらに、伝説中における在原業平の登場が『伊勢物語』の影響であることは論を俟たない。東下りの途中の業平が、「略縁起」の中では「素麺地蔵」を下野国から勧請する役を与えられているのである。

ともあれ、宇津ノ谷峠に遊歴の僧の姿で現れた「素麺地

蔵」は直ちに食人鬼を退治した。この場面に関して留意すべき点が二つある。第一は、地蔵が食人鬼をだまして一小丸に化けさせると、その小丸を杖で砕いて飲み込んだことである。これに似た伝説は日本各地に伝えられている。例えば、「三枚の護符」と呼ばれる昔話が全国各地に残されている。その中の一つの類型として、小僧が三枚の護符を用いながら食人鬼や山姥のもとから逃れてきて、和尚にかくまってもらうというものがある。和尚は追いかけてきた鬼や山姥をだまして豆や味噌に化けるようにしむけ、それを食べてしまう。このような説話の場合、豆や味噌に化けた鬼等を食べるのは、多くの場合、小僧ではなく和尚である。[37] すなわち、修行を積んで験力をより多く備えている者が、鬼等を食べる役割を果たしているのである。

しかし、宇津ノ谷峠の説話において、この役回りを演じているのは単なる和尚ではない。それはあらゆるものを食い尽くす日光山の「素麺地蔵」であり、愛宕権現を垂迹とする勝軍地蔵である。宇津ノ谷峠の食人鬼を退治するためには、それだけ強い験力の持ち主を登場させる必要があったのである。その理由は、この伝説の舞台となったのが他ならぬ宇津ノ谷峠だという点にある。すなわち、そこはあの世に連なる夢の世界と現実の世界との境である。それ故に、たとえ食人鬼のモデルが追剥や強盗であったとしても、ひとたびその伝説が生まれれば、人々はこの食人鬼をあの世に通じた存在とみなし、通常の力では到底太刀打ちできない相手と考えるようになったであろう。しかも、食人鬼が存在する間、あの世とこの世の境において、人々がどちらの世界に属するかを決定する権利は食人鬼に握られている。そうだとすれば、この峠を通行する人々は、当然、あの世への入口が塞がれることを願ったであろう。それ故にこそ、絶対的な力で「境を護る神」として、わざわざ下野国から「素麺地蔵」が勧請されることになったのである。

さて、留意すべき第二の点は、地蔵が食人鬼を退治する際に、「汝を化度」すると語っていることである。つまり、ここでは単なる鬼退治ではなく、悪業を為す鬼を、正道に生まれ変わらせようという意図が込められている。このような立場は、既に『氏家記録伝』の伝える日光山の「素麺地蔵」伝説にも含まれていた。しかし、ここで重要なことは、飲み込む地蔵が特別な験力をもっているばかりではな

く、飲み込まれた者も、それによって生まれ清まりを果たすことができる点である。しかも、その舞台となったのが「宇津（ウツ）ノ谷」、すなわち、そこに籠る者の心身を浄化させ、生命力を復活させる生まれ清まりの場所である。それ故、地蔵と宇津ノ谷峠はともに同じ機能を保持していることになる。言い換えれば、宇津ノ谷峠そのものが、飲み込まれた者を生まれ清まらせる地蔵と一体化されていると言うことができるのである。

### ㈥　地蔵の遷座と十団子

慶竜寺の「略縁起」によれば、食人鬼を退治した後、「彼野州素麺谷の尊像もまた、道中守護のため此峠にうつらせ玉ふ」と伝えられている。それ故に、慶竜寺の地蔵は弘法大師の作と言われているのである。しかし、日光山で素麺を食い尽くした地蔵は、今も氏家の堂原地蔵堂に祀られている。したがって、「略縁起」の記載に従うならば、宇津ノ谷峠の地蔵は正確には氏家の地蔵の分身と言うべきものである。

ともあれ、峠に祀られた地蔵はその後も道中安全の守護者として、言い換えれば、あの世とこの世の境において、あの世への入り口を塞ぐ者として往来の者達を守護し続けることになった。同時に、この地蔵は宇津ノ谷峠に鎮座することで、人々に対して生まれ清まりの舞台を提供し続けた。だからこそ、飛騨の甚五郎は浅間神社造営に当たり、この地蔵に祈願することで心身を清め、棟梁としての生命力の更新をはかったのである。さらに、地蔵の「霊験のごときハ、雨をいのれば雨忽ちくだり、晴をねがへば天忽ち晴れ、疫病をのぞき、難産をすくひ、盗難火災をふせぎ、旅人をまもらせ玉ふ事、数ふるにいとまなし」と称された。「素麺地蔵」はあらゆるものを食い尽くす特別な験力の持ち主であればこそ、人々はこの地蔵に様々な願い事を託したのである。

一方、地蔵によって化度された食人鬼は、その後どうなったであろうか。「略縁起」は、食人鬼が退治された後、「今に至て、妖魔の障りなきのみならず、駅路繁栄の一境となる」と記している。すなわち、鬼は駅路衰退の元凶から一転して、駅路繁栄の要因となったのである。のみならず、一小丸に化けて地蔵に砕かれた鬼は、後に十団子の姿で蘇っ

た。そして、「これを所持せば、道中安全、諸事意のごとくならしめむ」と称される程の縁起物として、人々を守護する存在となった。まさに、食人鬼は地蔵の験力によって生まれ清まりを果たしたのである。

先に引用した『駿河記』の中で、十団子は食人鬼を退治する際に地蔵が用いた「念珠の遺形」と記されていた。しかし、これでは単なる鬼退治の説話にすぎず、鬼の生まれ清まりは成立しない。十団子を化度された鬼の姿とみなすからこそ、宇津ノ谷峠は生まれ清まりの場となり、地蔵はそれを促す存在として霊験を保証されるのである。その意味で、慶竜寺の「略縁起」は『駿河記』の伝える説話よりも完成度の高いものだと言うことができるであろう。

ところで、この十団子については、既に連歌師の宗長が『宗長手記』の大永四年（一五二四）六月の箇所で次のように記している。

十六日府中。折節夕立して宇〔津〕の山に雨やとり。此茶屋むかしよりの名物十たん（団子）こと云。一杓子に十つゝ。かならすめらう（女郎）なとにすくはせ興して。夜に入て着府。[56]

この記録から、十団子が一六世紀初頭には宇津ノ谷の名物として売られていたことが知られる。また、小堀遠州が元和七年（一六二一）に著した『辛酉記行』の中にも、十団子のことが次のように記されている。

そこを行過てうつの山に至りぬ。此里を見れば。白き餅の丸雪のごとく成を器に入て。是めせ（召）と云。とへばとふ（十）団子迚（とて）此里の名物なりと云。扨（さて）はもろこし（唐）より渡りたる餅にやあむなるといふ。さにはあらず。十宛杓によりてと（十）を団子とかたる。さらばすくはせよといへば。あるじの女房手づからいひかひ（飯匙）とりて。心のまゝにすくふ。是に慰て暮にけれ共。うつの山にかゝる。[58]

この記述からも、当時、十団子が茶店で名物として売られており、それを店の女性達が手ずからすくい取って客に渡していたことが窺われる。

ところが、林羅山が元和二年（一六一六）に著わした『癸未紀行』には「餅家多少ノ団、粒々細糸貫ク、山裏若シ暦無ハ、斯ヲ以十干ヲ算（かぞえ）ン」と詠まれており[59]、浅井了意が万治三年（一六六〇）頃に著わした『東海道名所記』にも、「坂のあがり口に、茅屋四五十家あり。家ごとに、十団子を

うる。其大さ、赤小豆（あずき）バかりにして。麻の緒につなぎ。いにしへハ、十粒を一連にしける故に。十団子といふならし」と述べられている[61]。こうした種々の記録にもとづいて、鈴木覚馬氏は「十團子につきては、種種説をなすものあり。曰、一説、此頃は、昔の如く掬ひて商ふものあり、又、絲に貫きて商ふものもありしが、漸く掬ふは廢し、絲に貫くこと用ゐられて、寛永（一六二四－一六四四）頃より、全く絲に貫くこととなりしと見ゆ[62]」と解説している。

ただし、こうしたいずれの記録によってみても、十団子が先にあり、後から地蔵伝説が付け加えられたのか、それとも始めに地蔵伝説があり、後から十団子が生まれたのかは定かでない。また、十団子の「十」という数の由来もはっきりとはわからない。地蔵の功徳を説く「十輪経」や、地蔵と同一視された閻魔を含む「十王伝説」との関わりが指摘されている程度である[63]。あるいは、かつて岡部宿に存在した「十楽院」との関わりはないであろうか。途絶した十楽院を再興し、今日の曹洞宗瑠璃山光泰寺の開山となったのが、食人鬼伝説の舞台である梅林院八世圓州舜光ということも、何かの因縁を感じさせるものである。

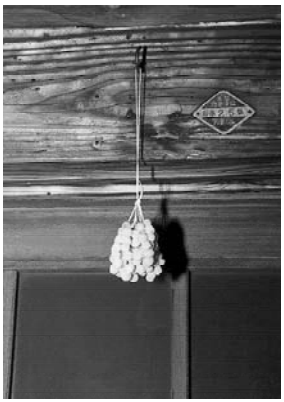

図８　軒先に下げられた十団子
（宇津ノ谷集落にて）

図９　『方言修行金草鞋』所載の
「十団子」図
（鈴木覚馬著、名著出版発行
『嶽南史』五より転載）

ちなみに、現在の十団子は、小豆程の小さな団子を十粒ずつ糸に通し、それを九連にしたものである（図8）。これは「九十苦離」を表すと言われており、地蔵縁日の八月二三日と二四日に慶竜寺で売られている。ところが、十返舎一九の『方言修行金草鞋』の中には、岡部側の茶店で大名行列の奴が串刺しの十団子を食べている絵が描かれている[64]（図9）。また、同じく岡部側の坂下地蔵堂では、慶竜寺と同じ日に行われる地蔵縁日の際に、直径二センチ程の団子を十個ずつ竹串に刺し、それを七、八串ずつ並べたものを一対にして地蔵に奉納している（図2）。宇津ノ谷峠の東西の麓において、形こそ違うけれども、「十団子」の風習が等しく地蔵に関係するものとして伝えられていることは興味深い点である。

### ㈦　もう一つの「素麺地蔵」伝説

ところで、宇津ノ谷峠には、これまで論じてきたものとは多少異なるもう一つの「素麺地蔵」の伝説が伝えられている。以下にその物語を、静岡新聞社発行の『ふるさと百話』の中から再録することにしたい。

駿河国宇津ノ谷峠の地蔵伝説（木村）

今は昔、下野の国、日光山に一人の雲水が訪れ、別墅（べっしょ）に至って一食をこうた。この寺では雲水の僧がきて食物をこうたときは、その好むところの食物を与え、これを食責めにするという一種変わった習慣があった。何も知らぬ件の雲水が「そうめんを」と望むと、果たして一山の衆僧がことごとく出てきてかわるがわるこれを勧め与えた。

ところが雲水は一向困惑する風もなく、勧められるままにこれをことごとく食い尽くし、少しもひるむ様子がないので、寺方の者の方がかえって根気負けしてついに食責めの儀は中止してしまった。

やがて雲水に啞然としている衆僧に「私は駿州宇津谷のふもとに住む者です。かの地をご通過の節は小庵にお立ち寄りください。ご歓待いたします。本日はたいへんお世話になりましたが、雲水の身で何も持っておりませんので、これを記念に」といって、所持していた錫杖の金輪の半輪を割って置いて帰っていった。

数カ月の後、偶然京に上ることになった日光山の一僧侶が、一山の者たちの依頼を受けて、駿州宇津谷の

ふもとに、前に雲水が教えていった小庵をたずねたが一向にわからない。たずねあぐんで、それとおぼしき所に至ると小さな地蔵堂があり、のぞいてみると一基の地蔵尊が立っているのみであった。

立ち去りかけた僧が、ふと地蔵の所持する錫杖の金輪を見ると半輪である。怪しんで、前に雲水が日光山に置いて帰った半輪を出して合わせると分厘の差もない。ここで初めてかの雲水はこの地蔵尊の化身であることがわかり、すっかり驚いたという。だから現在でも地蔵尊の錫杖の金輪は半輪であり、他の半分は日光山にあるという。(注)

この伝説が慶竜寺の地蔵に関するものなのか、それとも坂下地蔵堂の地蔵のものかは定かでない。もっとも、慶竜寺の地蔵は元来錫杖を持つ姿ではないことから、坂下地蔵堂にまつわる話である可能性は高い。しかしながら、こちらの地蔵も、現在では錫杖の金輪が半分欠けた状態ではないために、はっきりと断定することができないのである。

ともあれ、この伝説が慶竜寺の「略縁起」を簡略化し、その内容に改変を加えたものであることは確かであろう。その上で、この伝説の大きな特徴は、主人公の地蔵が始めから宇津ノ谷峠のものであり、たまたま日光山を訪れた旅の雲水として描かれていることである。これは、宇津ノ谷峠の地蔵を「客人神」の立場から、「土着神」として定着させようとした試みとみなすことができる。

けれども、かえってそのために、この地蔵はあえて日光山で素麺を食べるべき積極的な理由を失った。それ故、地蔵は日光山で意趣返しを行う必要も、さらには、強欲な住人達に勧善懲悪の説教を行う必要もなくなった。その結果、この伝説は単なる大食漢の地蔵の話と、遠隔の地に現れた地蔵が、自己の身元を示すために金輪の半分を置いてきたという神秘的な要素を含むだけのものになってしまった。のみならず、この説話の中では生まれ清まりを促す「宇津（ウツ）ノ谷」峠の地蔵という性格さえも失われている。他所で生まれた地蔵伝説の強引な在地化が、結果的には本来の説話が持っていた意味や迫力を失わせることになったのである。

そして、これとは対照的に、慶竜寺の「略縁起」は日光山の「素麺地蔵」伝説にもとづきながら、その中に新たな

要素を付加し、宇津ノ谷峠に特有の宗教的な意味付けを与えることに成功している。つまり、それは地蔵伝説そのものの生まれ清まりを実現させていると言うことができるのである。

## 三　宇津ノ谷峠と地蔵信仰

### ㈠　宇津ノ谷峠に伝わる他の地蔵伝説

宇津ノ谷峠に祀られている二体の地蔵に関しては、これまで論じてきた「素麺地蔵」伝説の他にも、少なくとも三つの伝説が伝えられている。

その中の一つは、地蔵が子供の死を予言するもので、春田鐵雄氏が地元の古老から採取した話として、自著の『蔦の細道物語』の中に記録している。それによれば、ある旅人が峠の地蔵堂で一晩を明かすことにした。旅人が夜更けにふと目覚めると、お堂の中で話し声が聞こえてくる。のぞいてみると、そこには坂下の地蔵が訪ねてきており、二体の地蔵がこのような話をしていた。「あの子もかわいそうだ。せっかく生まれてきたのに、間もなく金物に当たって死んでしまうからね。」「そうだね。金物に当たってね。」「かわいそうだけれども、何もしてあげられないね。」そこまで聞いた後、旅人は再び寝てしまった。翌年、この旅人がまた宇津ノ谷の地を通りかかると、ある農家で葬式を行っていた。子細を聞くと、生まれたばかりの赤ん坊の頭上に金槌が落ちてきて、その赤ん坊が死んでしまったという。それを聞いて、旅人は一年前の地蔵堂での出来事を思い出したという。(66)

この話によれば、慶竜寺の地蔵と坂下地蔵堂の地蔵は別々の存在だということになる。同時にこの話は、地蔵達が人間の生死を自由に操作することはできないけれども、それを予知する能力をもっていることを窺わせる。このことは、地蔵があの世とこの世の境に位置することを改めて物語っている。

しかも、慶竜寺と坂下地蔵堂の境内には、それぞれ賽の河原と呼ばれる場所があり、そこには古い石塔が並べられている。(67) 慶竜寺の住職によれば、今も人知れず賽の河原を訪れて、花束や地蔵像等を奉納して行く人がいるという。また、八月二三日と二四日の地蔵縁日の際には、慶竜寺と坂下地蔵堂のそれぞれに、過去一年間に亡くなった人の遺

族が初盆供養のために近在から訪れる。[68] 現代においても、宇津ノ谷峠はあの世とこの世の境としての性格を色濃く残しており、この峠に鎮座する二体の地蔵は、あの世における救済をもたらす存在として人々の信仰を集めているのである。

一方、他の二つの伝説は、いずれも坂下地蔵堂の地蔵にまつわるものであり、一つは「鼻取地蔵」として、もう一つは「稲刈地蔵」として知られている。

「鼻取地蔵」の伝説は、一日の農作業を終えたお百姓が家に帰る途中で、連れていた牛が急に動かなくなってしまった。お百姓が困っていると、一人の子供が現れて牛の鼻を取り、楽々とひいていった。ところが、お百姓が目を離したすきに、子供は姿を消してしまった。残っていた足跡をたどると、地蔵堂の中で消えていたというものである。[69]

別の伝承によれば、ある農家で田植えの時期に人手が足りなくて困っていると、見慣れない子供が現れて、馬の鼻を引っ張って手伝ってくれた。けれども、昼飯時になると、子供の姿が見当たらない。翌日、田植えが早く終わったので、その家の主人が地蔵堂にお礼参りに行くと、地蔵の足が泥まみれになっていたという。[70]

このような「鼻取地蔵」伝説は、全国に数多く残されており、宇津ノ谷峠に特徴的なものではない。例えば、静岡県内では三島市の光安寺等に同様の伝説が残されている。[71]

一方、「稲刈地蔵」伝説は、ある年、宇津ノ谷峠に程近い横添村に住む一人の信心深い若者が、稲刈りの後で仲間と伊勢参りに行くことになっていた。出発の前日までに稲刈りが終わらなかったが、翌朝起きてみると、稲はすべて刈り取られていたという。さらに、伊勢参りの道中、府中（現在の静岡市）から来たという青年がこの若者に親切にしてくれた。伊勢から帰った後で、若者がこの青年を府中へ送って行こうとすると、青年は坂下地蔵堂に入って姿を消したという。[72]

この伝説も、地蔵が農民達の仕事を手助けしてくれるというものであり、「鼻取地蔵」伝説と同様、類話が各地に伝えられている。けれども、こうした伝説が複数残されているということは、坂下地蔵堂の地蔵が農民達の篤い信仰を集めていたことの証しである。やがて、近在の農民達の間には、願い事があるとこの地蔵に鎌を供える習慣が生まれ

た。地蔵堂の中には、今も江戸時代に供えられた木製の鎌や、鎌を描いた絵馬等が残されている。

このように、坂下地蔵堂の地蔵は農民達の守護者としての性格を強くもっている。このことは、慶竜寺の地蔵が生まれ清まりをもたらす存在として、また、主として道中安全と災厄除けの祈願の対象とされていたことと対照的である。いわば、この二体の地蔵はそれぞれ役割を分担することによって、宇津ノ谷峠とその周辺の村落を護る機能を果たしている。その意味で、二体の地蔵は互いに相手の存在を必要とする相補的な関係にあると言うことができるのである。

### (二)「素麺地蔵」伝説翻案の意義

これまで見てきたように、宇津ノ谷峠の二体の地蔵をめぐっては幾つかの伝説が残されている。その中でも、峠の地蔵、言い換えれば「境を守る神」としての性格を最も明確に示しているのは、「素麺地蔵」による食人鬼退治の伝説であろう。

しかし、この伝説の中には「素麺地蔵」と「食人鬼退治」という、一見するとまったく関係のない二つの伝説が含まれている。従来は、その両者の関係について十分な解明が行われてこなかった。のみならず、これまでは「宇津ノ谷」と「宇津（都）の宮」の名前の類似ばかりが注目を集め、「素麺地蔵」伝説が「野州宇津の宮の山奥」を舞台としている理由には注意が向けられてこなかったのである。

そこで、本稿ではまず始めに下野国の「素麺地蔵」伝説を紹介することで、宇津ノ谷峠の「素麺地蔵」伝説の中に「野州宇津の宮の山奥」が登場する理由を明らかにした。その上で、二つの「素麺地蔵」伝説を比較することによって、宇津ノ谷峠の伝説が下野国のそれを忠実に継承しながらも、必要に応じて改変していることを確認した。さらに、宇津ノ谷峠に出没する悪鬼を退治するために、特別な験力をもつ「素麺地蔵」を頼らねばならなかった理由を示し、併せて、この悪鬼が「素麺地蔵」によって峠の守護者として生まれ変わる理由を考察した。つまり、宇津ノ谷峠の「素麺地蔵」はあらゆる者に生まれ清まりをもたらす存在であるという、下野国の「素麺地蔵」がもっていなかった性格を獲得したのである。さらにこの地蔵は、あらゆる者がその

場所に籠ることによって生まれ清まりをはたす「宇津（ウツ）ノ谷」峠そのものと一体化することで、この土地への定着化を果たしたのである。

本稿ではまた、下野国の「素麺地蔵」伝説を宇津ノ谷峠にもたらした人々として、日光山の修験者の可能性を指摘した。この点については、関連があるかもしれない幾つかの状況証拠があるのみで、確たる証拠があるわけではない。けれども、仮に修験者とは異なる別の伝播者の存在を考えなければならないとしても、二つの伝説が極めて高い類似性を示している以上、単なる風聞等によって「素麺地蔵」伝説が伝えられたと考えることはできないだろう。

伝説の翻案は全国各地に数多く存在する。しかし、その全てが常に成功しているとは限らない。そうした中で、慶竜寺の「略縁起」は他所からもたらされた伝説を基盤としながらも、その中にこの土地独自の宗教的、歴史的、さらには文学的な要素を盛り込んで、しかもそれらが破綻することなく見事に一つの伝説としてまとめあげられている。のみならず、この伝説によって宇津ノ谷峠そのものが、古来伝えられてきた生まれ清まりの場としての地位を改めて

図10　縁日の慶竜寺
（平成15年８月23日撮影）

保証されることになった。そうした意味において、この伝説の翻案は、単に地蔵の由来を説くにとどまらない大きな意味をもっていたと言うことができるのである。

**注**

（1）宇津ノ谷峠については、主に春田鐵雄『続改定 丸子路を歩く』（自費出版、一九七三）、同『蔦の細道物語』（郷土「鞠子」を愛する会、一九七五）、同『新・丸子路考』（静岡谷島屋、一九八三）、建設省静岡国道工事事務所監修『東海道宇津ノ谷峠――道に咲いた文化――』（東海道弥次喜多研究会、一九九三）を参考にした。

（2）秋里籬島『東海道名所図絵』（粕谷宏紀監修『新訂東海道名所図会［中］』新訂日本名所図絵集二、ぺりかん社、二〇〇一）二八一頁。

（3）『吾妻鏡』第十九（黒坂勝美編『新訂増補国史大系』三二、吉川弘文館、一九六四）六五一頁。

（4）『伊勢物語』（坂倉篤義他校注『竹取物語 伊勢物語 大和物語』日本古典文学大系九、岩波書店、一九五七）一一六―一一七頁。

（5）野本寛一「峠の信仰と文学――古代駿河編――」『地方史静岡』四（一九七四）六五―七九頁を参考にした。ちなみに、野本氏は宇津ノ谷峠が「霊のこもる場所」であったことの明確な根拠を示すことはできないとしながらも、その裏付けとなるであろう三つの点を指摘している。すなわち、「①宇津ノ谷の地形は、現在の静岡市西方約五キロにわたって細く深く入り込んだ谷であり、文字通り「ウツ」の状態を示していること、②宇津ノ谷は古代有度、安倍平野の西方にあたり、祖霊が西方にあるとする信仰や山中他界観の信仰と一致すること、③宇津ノ谷には峠があり、峠は境であることから、特に他界との境の意識を重層的に観じさせる地であったと考えられることなど」である（野本前掲論文、六六頁）。

（6）浅井了意『東海道名所記』（浅倉治彦校注『東海道名所記』一、平凡社、一九七九）二〇三頁。

（7）野本前掲論文「峠の信仰と文学」（本稿注5）六八―七一頁。なお、野本氏は猫石を古代の境神の磐座とみなす根拠として、『東海道名所図会』における「こゝ（猫石周辺）を神社平という。むかし社ありし古跡なりと教ゆ。按ずるに、『駿河風土記』に、「宇津谷本原神社は、仁徳天皇紀七年乙卯祭る所なり」云々。もしこの神社の古跡ならんか」という記述を挙げている（本稿注2、二八一頁、（ ）内引用者）。

（8）柳田國男「賽の河原の話」『定本柳田國男集』二十七（筑摩書房、一九七〇）二八〇―二八一頁。

（9）柳田國男「地蔵木」『定本柳田國男集』十一（筑摩書房、一九六九）一四七―一五一頁。その他、同「石神問答」『同』十二（筑摩書房、一九六九）や、和歌森太郎「地蔵信仰について」『地蔵信仰』（桜井徳太郎編、民衆宗教史叢書第十巻、

雄山閣出版、一九八三）を参考にした。

（10）この梵鐘は戦時中に供出されて現存しない。銘文は『岡部町誌』（岡部町、一九一二、静岡県立図書館所蔵本）の記録による。

（11）地蔵堂内に入ると、右側の小部屋に台座に半跏の姿勢で坐る高さ一六〇センチ程の地蔵が安置されている。しかし、この黒くすすけた「クロ地蔵」は本尊ではない。地元の人々によれば、「クロ」という語は「隅」を意味する方言である。また、地蔵堂の内壁には明和六年（一七六九）と文政一一年（一八二八）の開帳の記録が墨書されている。本尊の秘仏は昭和三八年の開帳の際に修理されたため、肌の白色と、金蘭の袈裟の彩色が鮮やかである。また、厨子の横には脇侍の掌善童子と掌悪童子が安置されている。なお、坂下地蔵堂について、詳しくは春田前掲書『蔦の細道物語』（本稿注1）五二―六〇頁を参照。

（12）この時、峠から下ろした地蔵堂が、現在の慶竜寺の本堂の中心をなしているという。詳しくは、春田前掲書『蔦の細道物語』（本稿注1）八六頁を参照。

（13）春田前掲書『蔦の細道物語』（本稿注1）七九頁、建設省静岡国道工事事務所前掲書『東海道宇津ノ谷峠』（本稿注1）五九頁による。なお、地蔵遷座の年は慶竜寺の記録による。

（14）こちらの地蔵の厨子の前にも脇侍の掌善童子と掌悪童子が安置されている。

（15）現在慶竜寺で配布している「地蔵尊略縁起」は静岡県立図書館所蔵の「略縁起」にもとづくものであるが、漢字や仮名づかいの他、文章にも部分的な修正が施されている。また、鈴木覚馬『嶽南史』五（名著出版、一九七三）六六九―六七〇頁には、これと多少異なる伝説も収録されている。

（16）以下の文中の（　）内に底本の頁数を示す。翻刻にあたっては、〈　〉内の見出しと句読点を新たに付した。

（17）氏家町史作成委員会編『氏家の寺社と信仰』（氏家町史別冊、氏家町、一九九四）一一頁。

（18）『氏家記録伝』（栃木県立図書館所蔵本）四―九頁。ちなみに、現存する『氏家記録伝』は、同書の「写本の由来」（二頁）によれば、享保八年の洪水で破損した原本を、宝暦五年に荒巻三郎衛門信瑞が書写、補筆したものである。ただし、私が参照したものは、この写本を昭和二八年に荒川祐海師が筆写したものを、さらに同年、中津原直一氏が改めて筆写したものの複写本である。

（19）大金重貞『那須記』（栃木県史編さん委員会編『栃木県史資料編・中世五』栃木県、一九七六）二八一―二八二頁。

（20）大金前掲書『那須記』（本稿注19）二八二頁。

（21）『氏家記録伝』（本稿注18）七頁。なお、漢文調の原文を引用者が書き下した（以下同じ）。

（22）氏家町史作成委員会前掲書『氏家の寺社と信仰』（本稿注17）一四―一五頁。

(23) 久野俊彦「素麺地蔵の説話と日光責め」『下野民俗』三五（一九九五）は、『那須記』『下野風土記』『氏家記録伝』におけるそれぞれの当該箇所の全文と、「素麺地蔵」伝説に関連する諸文献の全文を掲載し、「素麺地蔵」伝説の成立事情についての示唆的な考察を行っている。

(24) 『氏家記録伝』（本稿注18）一七―一八頁による。なお、書き下しにあたっては、原本に記載の返り点や送り仮名の一部を独自に改めるとともに、適宜送り仮名を補った。

(25) 「死亡した」という解釈は、『那須記』『下野風土記』にもとづくものである。

(26) 大金前掲書『那須記』（本稿注19）二八四頁。

(27) 大金前掲書『那須記』（本稿注19）二八四―二八五頁。

(28) 『下野風土記』（佐藤行哉校訂『下野風土記』栃木県郷土文化研究会、一九五八）五〇頁。

(29) 鷹橋義武『日光名跡誌』（鷹橋治郎左衛門板元、享保一三年〈一七二八〉、栃木県立図書館所蔵本）二四丁。

(30) ただし『日光山志』には、「往古は今の別所の辺に社頭ありしが、稲荷川たびたびの洪水に山根を崩しけるゆゑ、正保二（丙戌）年毘沙門堂公海大僧正御願主にて、社頭造り替への砌、往古の別所の地へ社頭を引き移したまひ、旧社の跡へ別所を曳かれたりといふ」と記されている（植田孟縉『日光山志』〈鈴木棠三編『日本名所風俗図絵二 関東の巻』角川書店、一九八〇〉三三頁）。

(31) この伝承を記した最も古い記録は「瀧尾建立草創日記」「日光瀧尾草創建立記」等である（いずれも菅原信海校注『神道大系神社編三十一 日光・二荒山』神道大系編纂会、一九八五に所収）。ただし、この両書は鎌倉時代の作とみなされており、空海の日光入山は史実ではないという見解が近年では有力である。

(32) 植田前掲書『日光山志』（本稿注30）二六頁。

(33) 鷹橋前掲書『日光名跡誌』（本稿注29）二三―二四丁。

(34) 小暮某「強飯式 附生岡神社強飯式」『日光山輪王寺』一九（一九六三）三二頁。その他、日光市史編さん委員会編『日光市史』下（日光市、一九七九）一一九一―一一九九頁も参照。

(35) 藤井萬喜太「日光山の強飯式」『旅と傳説』九（十一）（一九三六）三五頁。

(36) 貝原益軒『日光名勝記』。ちなみに、藤井氏の引用箇所は、私が参照した益軒会編『益軒全集』七（国書刊行会、一九七三）所載の『日光名勝記』二一九頁に該当するが、本稿で引用した当該部分は同書に記載されていない。それ故、本稿における引用は藤井前掲論文「日光山の強飯式」（本稿注35）三三頁によった。ただし、藤井氏は出典を『東路之記』と記している。

(37) 柏崎永以『古今沿革考』（日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第一期十七、吉川弘文館、一九七六）四三頁。

(38) 藤井前掲論文「日光山の強飯式」（本稿注35）三三頁。

（39）大金前掲書『那須記』（本稿注19）二八四―二八五頁。（　）内は引用者、原文は漢文体である。

（40）『下野風土記』（本稿注28）四九―五〇頁。（　）内は引用者。

（41）『那須記』や『下野風土記』の中にこのような記述は存在しない。

（42）栃木県総合教育センターのホームページによる（二〇〇四年一月現在、http://www.tochigi-c.ed.jp/bunkazai/bunkazai/list/189.htm）。

（43）菅原信海氏は「強飯式もいつ始まったかよくわからなくて、中世頃から行なわれていた形跡があると思うのです。これは割に修験関係に関連づけて行なわれた行事だと思います」と述べている（『日本人の神と仏――日光山の信仰と歴史――』法蔵館、二〇〇一、二一六頁）。

（44）瀧尾権現社の脇を流れる稲荷川では、古くからしばしば洪水が発生していたことを諸記録が伝えている。一例として本稿注30の中の引用文を参照。

（45）久野俊彦氏は、「素麺地蔵」の伝説は寛永一二年（一六三五）から正保二年（一六四五）の間に筆写された狂言「日光山」を基調としながら、強飯式の儀礼にもとづいて成立したと論じている。さらに同氏は、この説話は戦国時代末期に焼失した地蔵堂の再建時に新たに生み出されたものであり、その時期を一七世紀初期とみなしているようである。以上、久野前掲論文「素麺地蔵の説話と日光責め」（本稿注23）六三頁、六五―六六頁による。

（46）野本寛一氏は、この二つの地名の類似が単なる語呂合わせだという見方を否定した。その上で、「宇都宮」は二荒山神社の鎮座する「臼が峰」に由来する地名であり、「臼が峰」は神の籠り処であるとともに、地域の人々の禊ぎの籠り処であった可能性を指摘している。つまり「宇津ノ谷」と「宇都宮」とが、いずれも籠り所という宗教的な意味を共有していることに意義を見いだそうとしているのである。なお、同氏は日光山の「素麺地蔵」伝説には言及していない。以上、野本前掲論文「峠の信仰と文学」（本稿注5）八〇頁による。

（47）田中久雄「地蔵信仰の伝播者の問題――『沙石集』『今昔物語集』の世界――」『地蔵信仰』（本稿注9）一三九―一六六頁。

（48）東水選述『三山雅集』（浅倉治彦編『日本名所風俗図絵一　奥州・北陸の巻』角川書店、一九八七）一三五頁。ちなみに、「素麺不動」伝説は、小僧に化身した不動が遠来の客に素麺を饗応するというものであり、その内容は「素麺地蔵」伝説とは異なるものである。

（49）無住国師『沙石集』（渡邊綱也校注『沙石集』日本古典文学大系八五、岩波書店、一九六六）一〇五頁。

（50）この他に、日光山の「素麺地蔵」伝説は、神奈川県横須賀市の浄土宗真福寺の別名「枕返し地蔵」にも伝えられてい

る。ちなみに、同寺の開創は享禄元年（一五二八）である。また、日光山内では日光市清滝町の天台宗清滝寺にも「素麺地蔵」と呼ばれる地蔵が祀られている。しかし、同寺は明治時代以降無住時代が続いたため、この地蔵の由来等は不明である。

(51) その後、十楽院は改宗、復興されて、慶長一二年（一六〇七）に曹洞宗光泰寺として改めて開かれた。十楽院に関する伝承は、この光泰寺に伝わるものである。

(52) 氏家町史作成委員会前掲書『氏家の寺社と信仰』（本稿注17）は、観応二年（一三五一）の駿河国薩埵山合戦で氏家氏が奮戦したことや、蓮生法師（宇都宮頼綱、正元元年〈一二五九〉没）とその弟の信生法師（塩谷朝業、嘉禎三年〈一二三七〉没）がしばしば宇津ノ谷峠を通過していることを、氏家の地蔵伝説と宇津ノ谷峠のそれとが結び付いた根拠として示唆している（一三頁）。しかし、これらの事柄は、いずれも「素麺地蔵」伝説の成立や日光山の強飯式の発祥よりも古い可能性があり、その見解を認めることは困難である。

(53) 桑原藤泰『駿河記』（足立鍬太郎校訂『駿河記』臨川書店、一九七四）下巻、六八一頁。

(54) 建設省静岡国道工事事務所前掲書『東海道宇津ノ谷峠』（本稿注1）一二一―一二三頁。

(55) 柴田芳憲『藤枝・岡部・大井川の寺院』（藤枝志太仏教会、一九九八）一九頁。なお、同書一八頁によれば、梅林院の前身を真言宗とする伝承もあるようである。ちなみに、梅林院は明治一五年の火災で古記録を失っているため、詳しい寺歴等は不明である。

(56) 新庄道雄『駿河国新風土記』（足立鍬太郎校訂『修訂駿河国新風土記』国書刊行会、一九七五）上巻、三一〇頁。

(57) 関敬吾『日本昔話大成』六（角川書店、一九七八）一三二―一五七頁を参考にした。

(58) 宗長『宗長手記』（塙保己一編『群書類従』十八、訂正三版、続群書類従完成会、一九五九）二七七頁。

(59) 小堀遠州『辛酉記行』（塙保己一編『続群書類従』十八下、訂正三版、続群書類従完成会、一九五七）一二九八―一二九九頁。

(60) 林羅山『癸未紀行』（富士川英郎、佐野正巳編『紀行日本漢詩』一、汲古書院、一九九一）二八頁。漢詩体の原文を、引用者が書き下し文に改めた。

(61) 浅井前掲書『東海道名所記』（本稿注6）二〇三頁。

(62) 鈴木前掲書『嶽南史』五（本稿注15）一〇二頁。（　）内は引用者。

(63) 建設省静岡国道工事事務所前掲書『東海道宇津ノ谷峠』（本稿注1）一二〇―一二一頁。

(64) この絵は、鈴木前掲書『嶽南史』五（本稿注15）一〇二頁に掲載されている。

(65) 尾崎邦二郎「地蔵風土記」『ふるさと百話』四（小川龍彦

他著、静岡新聞社、一九七二）一二二頁。併せて、鈴木前掲書『嶽南史』五（本稿注15）六六八－六六九頁も参照。

(66) 春田前掲書『蔦の細道物語』（本稿注1）二三九－二四一頁。

(67) 慶竜寺にある賽の河原の石塔等も、明治時代に地蔵堂とともに峠の上から移したものである。

(68) 慶竜寺の地蔵縁日の様子について、詳しくは春田前掲書『蔦の細道物語』（本稿注1）八六－八九頁、二四三－二四五頁、建設省静岡国道工事事務所前掲書『東海道宇津ノ谷峠』（本稿注1）一六四－一六六頁を参照。

(69) 岡部町教育委員会編『岡部のむかし話』（再版、岡部町教育委員会、一九九五）九－一〇頁。

(70) 尾崎前掲論文「地蔵風土記」（本稿注65）一二〇－一二一頁。

(71) 土屋寿山、稲木久男『ふるさと三島――歴史と人情の町――』（文盛堂書店、一九八九）八五－八六頁を参照。

(72) 岡部町教育委員会編『岡部のむかし話』（本稿注69）四－六頁。

〈追記〉原資料からの引用は、原則として下記の方法によった。①漢文は書き下し文に改める。②適宜、句読点や括弧を補う。③旧字体や異体字は現行の書体に改める。④振り仮名は必要に応じて付加、もしくは省略する。⑤必要に応じて濁点を付す。⑥副詞や接続詞等は適宜漢字をひらがなに改める。⑦（　）内は引用者による注記である。また、翻刻活字本からの引用は、右記の①③④⑦の方法に従った。

〈追々記〉本稿の作成にあたっては、宇津山慶竜寺、坂下地蔵堂、瑠璃山光泰寺（以上静岡県）、ミュージアム氏家、日光山輪王寺宝物殿（以上栃木県）の関係各位から伺ったお話を参考にした。また、日光山の「素麺地蔵」伝説に関する資料検索においては、栃木県立図書館調査協力課の懇切なる協力を賜った。記して感謝申し上げます。